
17歳の傷

松原まいか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

17歳の傷

【Nコード】

N5680A

【作者名】

松原まいか

【あらすじ】

夢もなければ、明日への期待もない。『人は何の為に生きてるの？』高校三年生、結宇^{ゆう}が考えたこと・感じたこと……。この小説にはリスカや自殺行為など一部グロテスクな表現が含まれます。苦手な方はお控えください。

第一話 プロローグ（前書き）

アナタニ“ユメ”アリマスカ？

第一話 プロローグ

特にやりたい事もなくて

なにかをやる気にも
ならなくて

只 なんとなく生きている

時間だけが過ぎていって

そこにはちつとも大人になれない

あたしがいた

第二話 午後二時

目が覚めた…

携帯に目をやったら、昼の2時だった。今日も友達から連絡は来てなかった。

学校に行かないのは毎度のことなので、特に心配もしてないんだろ
う。

だるい体を起こして煙草に火をつけた。

吐いた煙が充満して、またあたしの部屋を煙草臭くした。

ニコチンの威力はどのくらいのものなのだろうか？

2年前は真っ白だった壁も、今では黄ばんでいた。

「今日は6時間だっけ」

今から行ってもどうせ間に合わない。

あたしはコンポの電源をつけた。流した音楽はコートニー・ラヴ。
激しい演奏とは対照的に、コートニーは悲しい歌を歌っていた。
死んだカートのことを思ってたのか、それとも誰か他の人のことな
のか。

人は歌を聴いて、それが心に残る歌だったとき、何に魅了するのだ
ろう？

演奏の上手さ・納得させる歌詞・アーティスト本人の偉大さ…

人それぞれだし、その歌一つ一つによって理由は色々あると思う。

この時あたしは歌詞に共感した。コートニーの力強い声によって歌
われたこの悲しい歌の歌詞に。。

思い出す
忘れもしないあの夏
正確に言えば
忘れられない夏

今では
時間が傷を癒して
キレイな思い出に
なってるはずだった
だけど
独りになると
不意に
つらい思い出が
頭をよぎる
時がある

気付いたら手首を切ってるあたしがいた。

流れた血は
真っ赤で
あつたかくて
何故だか
安心した

今まで薬を飲んでも、煙草を吸ってもイライラしてたのは、最近切
つてなかったからだったんだと思った。

血…

あたしの一部…

A B型の血…

あたしの血。

そのまま泣き叫んで疲れた赤ん坊のように
あたしは眠った。

第三話 白と黒

「ブーブーブー……」

携帯の音で目が覚めた。

睡眠を妨害されたあたしは止めると壁に投げ付けた。

寝てるのに無理矢理起こされるのは、あたしが嫌いなことの一つだ。そのまま数分うだうだして、自分で投げたのにわざわざ携帯を拾いに行く。なんて間抜けな行動だろう。

新着メール一件：愛

おはよー！明日は卒アルの写真撮影だから、担任が制服来てこいだつて！

END

まじ担任うつせえなー！！…… っておい！それだけかよ！

「明日は来てね」

とかないのー！？

はいよー！さんきゅー！

END

送信完了

愛には言わなかった。

言葉では表してないけど、いつも心配してくれてるのは十分わかってたから。

だけどたまには言ってほしいよな！。

ちよっと欲張りなあたし

愛とは高一の時に会った

背が低くて手足も小さい彼女。ぱっちり二重の大きな目に長い黒髪。黒い肌。

それに比べて

あたしは

背は普通なのに足がでかくて、奥二重。ミディアムの赤茶の髪。白い肌。

手は赤ん坊のように小さかった。

愛とあたしが並ぶと、まるでモノクロの世界に住んでるみたいで。

肌が黒い愛と白いあたし。

反対に白が好きな愛と黒が好きなあたし。

だから着る服はお互い自分の肌とは対照的なものばかりだ。

白と黒… 真逆の色・真逆の意味をもつ色

お互いに自分の持っていないものにひかれあつたのか、色とは裏腹にあたし達の仲はどんどん深くなった。

第四話 保健室

次の日

結局あたしは写真撮影をしなかった。

どちらかと言うと、写るより撮るほうが好きだ。自分の好きなようにレンズにおさめられるから。

だけど、今日は家で一日寝てるわけじゃなかった。クラスには足を運ばずに、保健室にいた。

「授業は？」

「出ない」

「行きなさいよ」

「めんどくせーいいの!」

「じゃ次行くんだよ!」

「はいはい」

ここはあたしの学校で一番好きな場所。夏は涼しくて、冬はあったかい。ベットがあるからいつでも寝れるし

っていうのは冗談で。

まあ一理あるけど…

「昨日はどうしたの？」

「寝てたー」

「なにやっつてんのー！」

「寝る子は育つー！..」

ドカッ

止めの一撃。

「いつてえーな！そんなんじや皺増えるぞー！」

「まだまだ若いもーん」

いつもこんな感じ。

彼女は今年からうちの学校で働いている保健室の先生。あたしは授業をサボってよくここに来る。

メグは、どんなに忙しくてもあたしのお話をいつも聞いてくれる。たわいのない話や、真剣な話まで。

メグは22歳で歳が近いから、まるでお姉ちゃんみたいな存在だった。

上がらないあたしには、嬉しかった。

「メグさあゝ化粧すればキレイなのに、なんでいつもすっぴんなの？髪も中途半端だし」

「私はありのままの姿の自分でいたい。それって大事なことだよ。」

「ふーん。」

あたしはわかったようで、わからなかった。

メグの発した言葉は聞き取れたけど、理解はできなかった。

メグは内面も外見も、ありのままの自分でいたいんだ。そう解釈し

た。

あたしは内面さえありのままなら、外見なんてなんでもいいじゃん
って思う。

だけど人間とは皮肉なもので、外見でその人を判断することがほと
んどだ。

どんなに自分を持つてる人でも、外見が周りの人と同じようだと、
あーあの人も“世間の流行”に流されてるんだなと思ってしまう。
少なくともあたしは。

第五話 仲間

あたしは人と一緒にされるのが大嫌いだ。それぞれ違う人間なのに、簡単にひとまとめにしないでほしい。

例えば学校の先生。

「君たちは受験生だというのに、ろくに勉強もしないでそれで受かると思ってるのか!? (怒)」

つか、あたし進級する気ないし。

家とか予備校通って勉強してる子もいると思うけど?

たぶん先生は、そこまで深い意味で言っただつもりじゃないんだろう。だけど、世間に対して壁を造ってるあたしには妙にイラつきを覚えた。

この世の中

嘘で

塗り固まられた世界

ほとんどの人間が

同情を欲し

それに答える人間を

欲しがる

そんな友情ならいらぬ

それだけの気持ちなら…

傷を舐め合っている人間は相手の為に

してる訳じゃない
自分の傷を消毒する為に
他人が必要だから
してるだけ

相手の為にとまってしてることは
実は…
自分の為だったりする

“同情”

「ガチャッ」

保健室のドアが勢い良く開く。

「あ！おはよ！」

「おはよー！おまえら来てたのかよ！」

「ってかこっちの台詞！」

「はいはい。」

入ってきたのは愛と亜美と香奈だった。

亜美は背が高く、髪も長い。高一の時に知り合った。クラスは同じになったことがないけど、愛の友達だったから自然と仲良くなった。

香奈とは高二の時にクラスが同じだった。
黒いミディアムヘアに、やさしそうな目。

一人でいたあたしに話し掛けてきた子だった。最初は抵抗があったけど知らず知らずのうちに、あたしがよく話すようになっていた。

「結宇、写真撮影は？」

「写らねー」

「結宇らしいね。」

香奈がいった。

「まーねー！」

あたしはそう答えた。

学校が嫌いなのに、なんでわざわざ楽しそうに笑って、学校の連中と写らなきゃいけない？

“2007年の卒業生”として記録が残るのもごめんだ。

「キーンコーンカーンコーン……」

チャイムが鳴った。短い10分休み終了の音。

「結宇、行きなさい！」

メグの目がキラリと光る。

あたしはしぶしぶみんなと教室へむかった。

第六話 モットー

あ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5680a/>

17歳の傷

2010年12月25日14時10分発行